

「異邦人のために囚人となった」 森田雄三郎先生



森田雄三郎氏略歴

一九三〇年一月二日生まれ。五三年京都大学文学部卒業後、六一年五月同志社大学商学部専任講師として入社。六三年同助教授、六九年同教授に就任。九五年同名誉教授。九五年定年退職。
二〇〇〇年四月二十五日永眠 七十歳

桜の季節もいつか過ぎ、イースターも過ぎたそんな春の朝早くに先生の訃報に接しました。

実は先生のご容体が思わしくなくことを知って病室を訪れたのは五日前の四月二十一日のことでした。先生は目を見開き天井の一点を見詰めておられました。

先生は何を思い何を祈っておられたのでしょうか。「目を上げて山々を仰ぐ(詩編一二二)」が如くその視線は清らかで地上の様々の状況を超えた広い視野と奥行きを感じました。そして私は十年前の一九九〇年一月月の出来事を思い出していました。

大学商学部で私は創立者新島襄先生の墓参を学生のために企画したことがあります。降っていた雨も上がり、一陣の風が紅葉を地上に降り注ぐまことに美しい東山若王子の墓前で、先生は同志社の創

立にいたるまでの話を「あなた方異邦人のために囚人となったパウロ」のエフェソ人への信徒の手紙第三章を読まれて話し出されたのです。それは日本人のためにキリストに囚われた者、神に囚われた者としての新島先生の生涯のご紹介だったので。

私には森田先生ご自身の生涯も、キリストの囚人となり、またそれを自ら誇りとしてきたと思えてなりません。

先生は商学部というきわめて実践的な学部の中で一人宗教学を担当してこられました。傍目には私たち専門科目担当者との間に距離があったと見えたりもしますが、先生は雑用に煩わされず、学問に没頭できたその環境をむしろ好まれていたようです。重そうな大きなカバン、度の強いめがねをかけて、ご自宅と研究室を往復する先生のお姿は、昔の帝大の

哲学教授の趣でした。

先生は大著『キリスト教の近代性』(学位論文)を書かれた一方で、わかりやすい『シュバイツァー 人と思想』『キリスト教の四季』といった書も物され、また朝日カルチャーセンター(大阪と京都)で市民講座を長年にわたって担当してこられた庶民派学者でもありました。研究者肌の受講生がいて、予習が大変だといっておられたのを記憶しています。すべてに全力投球される先生でもありました。その先生は与えられた生命を完全燃焼させて御許に召されました。悲しみの内にある京子様、ご令息様の上に神の癒しとご平安とが与えられますようお願いいたします。

(日本基督教団南大阪教会における葬儀での弔辞 抜粋)

玉村和彦(天学キリスト教文化センター所長)

尾崎久仁博先生の死を悼む



尾崎久仁博氏略歴

一九五八年二月二〇日生まれ。八八年京都大学大学院経済学研究科修了後、滋賀大学経済短期大学学部助教などを経て、九三年同志社大学商学部専任講師として入社。九五年同助教授に就任。
二〇〇〇年五月三〇日永眠 四十二歳

大学商学部で「流通論」を担当されていた尾崎先生がアメリカ・バーモント大学における在外研究中に過労のためか病におかされ、四十二歳の若さで急逝されたことは、誠に痛恨の極みです。

尾崎先生が本学に就任されたのは一九九三年のことでしたから在職期間は七年という短い期間でしたが、この間に先生は学内外で精力的に活躍されました。

第一に、先生はその勤勉実直な性格から就任後すぐ教務主任や学生主任に抜擢され、また入試や情報処理関係の学部間にもまたがる委員会にも派遣され、まさに八面六臂のご活躍で、学部や大学の発展のために大いに貢献されました。

第二に、先生は忙しくても「やるべきことはやる」という強い信念の持ち主でした。先生は一九九八年にそれまでの研究を集大成され、『流通パートナシップ

論』（中央経済社刊）という素晴らしい書物を出版されましたが、この書物は翌年、学会賞（日本商業学会）に輝く書物となり、それはまた博士学位（京都大学）を取得なさる契機ともなりました。雑務で日々多忙な中でも「やるべきことはやる」という強い信念を貫かれたことは誠に立派でした。今回の在外研究でもその研究成果をもとに第二作目を世に問われる予定でしたが、志半ばで頓挫されたことはさぞ無念だったろうと思います。研究熱心な先生であっただけに、誠に同情を禁じ得ません。

第三に、先生は研究熱心であっただけではなく、教育にも大変熱心で、学生さんの面倒をよく見られたので、尾崎ゼミは毎年三桁の応募者を集める学部第一の人気ゼミでした。先生の日常生活といえ

ば、月曜から金曜まで研究室に詰めて（土曜は学会や研究会に出席）、学生さんがドアをノックすれば嫌な顔ひとつせず気さくに応対し、学生さんが立ち去れば直ちに傍らのパソコンに立ち向かうという毎日だったのでないでしょうか。

第四に、先生は学内だけではなく、学外でも広く活躍されました。とくに日本商業学会では、全国大会や部会で研究発表をなさるだけではなく、長年にわたる本部役員を務め、学会の発展のために大いに尽力されました。将来は学会の中核として嘱望されていただけに、残念至極というほかありません。学会の大きな財産を失った気がしています。

学内に残された私どもは今後、先生のこれまでの学内外での姿勢に学び、精進・努力するほかありません。尾崎先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

光澤滋朗（大学商学部教授）

小門紀久先生を偲んで



小門紀久氏略歴

一九〇二年二月一日生まれ。二三年同志社高等女学校専門部家政科卒業後、四五年一〇月同志社高等女学校教諭として入社。四八年同志社女子中学校・高等女学校教諭に就任。六七年二月に定年退職されるまで、二十一年間にわたり同校の教育に尽力された。
二〇〇〇年七月六日永眠 九十八歳

もう五十年前にも前になりますが、恩師のお勧めを受けて母校の女子中高に就任いたしました私を、既に家庭科で教鞭を執っていらつしやいました先生は優しく迎えて下さいました。当時女子部の育成、発展の為に生涯を捧げられたデントン先生が亡くなってまだ日も浅く、長年におたって先生をお世話下さっていた星名久先生を師と仰がれ、ご親交の厚かった小門先生は、今の黎明館の北の方にあつたデントンハウスに、度々星名先生を訪ねて出入りなさっていたように思います。先生のお話から、私の女学生時代には戦争の激化により、杖をついて校内を静かに歩いておられるのを遠くから垣間見るのみで、授業では直接お目にかかれなかつたデントン先生を一層身近に感じるこ

とができ、嬉しゅうございました。
少し前まで女専の行事であつたクリス

マスパージェントが女子中高独自の催しとなつてから間もない時で、新しく舞台衣装を放課後おそくまでかかつて一緒に作つてまいりましたのも忙しい中の楽しい思い出となっております。ご在任中、何かと失敗の多い私をいつも支え、助けて下さいました先生、ご退職後、時折お宅にお邪魔しても教えていただくことが多く、いつまでも温かい先生でいて下さいました。時には厳しく、しかもいつも変わらず生徒たちを大切になさっていた先生、承ればお祖父様、お祖母様が新島先生の伝道演説に深く傾倒され、故郷笠岡でキリスト教を広めることに熱中され、先生を同志社にお送りになつたとか。先生の同志社教育に関する一貫した姿勢をうかがい知ることができます。ご退職後も、ろうけつ染めやフランス刺繍をお楽しみになり、その作品をYWCAのバザ

ーに毎年出品なさつたり、ご逝去の一年前にはYWCAの活動の一環としてインドネシアから生体肝移植手術を受けに來た親子の手術後の生活の場としてご自宅の二階を提供なさり、またご自宅をお仲間の聖書研究の場として開放されるなど、お嬢様の克子様と共に身についた奉仕の生活に徹していらつしやいました。いつもお元気で玄関までお出迎え下さり、尽きないお話を聞かせて下さつた先生、晩年はすっかり克子様に甘えてお幸せそのものであつたことと存じます。その感謝で一杯のまま神様のもとへ旅立たれました。インドネシアの幼い子供を通して次世代の若者にご自分の夢を託して美しく二十世紀を生き抜かれた先生のご冥福を心からお祈りいたします。

浅野佐喜江（元女子中学校・高等学校教諭）

玉島将行先生を偲んで



玉島将行氏略歴

一九三四年二月二日生まれ。五八年京都大学理学部卒業後、同年同志社香里中学校・高等学校教諭として入社。七三年一月には永年勤務者として表彰を受けられた。九九年定年退職。
二〇〇〇年七月一六日永眠 六十六歳

驚きました！ 以前より玉島先生は、長い間体調の不調を訴えられ、いつも身体には気をつけられていました。しかし、定年退職され、やっとゆったりすごされているものと思っておりましたのに。こんなに早く、天国に召されようとは。

先輩の先生にうかがったところ、玉島先生が入社されてまもないある夏のころ、上半身裸になって授業したこともあったそうです。そのようなざつくばらんで豪快な、また自由な雰囲気をもつ一面もあったとのことでした。私がその後十五年程経って入社した頃の玉島先生は、とても物静かで冷静沈着な先生という印象でした。その先生が若い頃にそのようなスタイルで授業をなさっていたとは信じられません。きっと、講義に熱が入り、思わず脱いでしまわれたのでしょうか。近年の玉島先生といえば、何と

も教員会議での理路整然とした議長ぶりです。先生が議長をされた会議のときは、いつもうまく議事が進行していました。ただ、ここ十年ほどは体調がすぐれず、教員会議などへの出席もままならない状況でしたので、先生の名議長を見ること

ができなくなつてさみしい限りです。しかし、そのような状況のなかでも、機械いじりや音響が大好きな方でした。特にコンピュータに関しては先進的で、何かやつかいな操作上のトラブルや、新しいソフトが出たときの有効な使用法など、すぐに先生にお尋ねして解消したものでした。また、音楽にも大変興味をもたれていたそうで、先生のお宅のお部屋は音響システムがギッシリで、足の踏み場も無いそうです。

また、最近の全国的な理工系離れをとても嘆いておられ、本校でも少なからず

その影響を受けていることにも心を痛められ、自分の体調が回復すれば理工系復活にがんばるのだと考えておられたのに、その時もこないまま亡くなられてしまい、ほんとうに悔しかったのではないのでしょうか。残された私たちが、そのご遺志を継いで同志社香里の発展のためにがんばっていかねばと、改めて決意いたしました。玉島先生のご冥福を心からお祈りいたします。

見掛耕一（香里中学校・高等学校教諭）

「言い尽くせぬ感謝」



長崎寿栄氏略歴

一九五九年五月六日生まれ。八五年同志社女子大学大学院家政学研究所修士後、八七年同志社女子大学家政学部研究助手として入社。九一年同専任講師、九五年同生活科学部助教に就任。十三年間にわたり教育と研究に尽力された。
二〇〇〇年八月一八日永眠 四十一歳

私が長崎さんの訃報を受け取ったのは八月十八日の夜でした。思わぬ知らせに驚き、俄には信じることができませんでした。長崎さんを失った悲しみは癒えるどころかますます深まるばかりで、何故、どうしてという気持ちだけが重く心に残っています。

長崎さんと私とは、卒業論文で冲中央生の研究室を希望してこられてからのおつきあいです。その頃は学位論文を書いていて、実験実験の日々が続いています。そんな私に「先生の実験を私も手伝わして下さい」と言われ、ご自身の実験が終わった後や日曜日も学校に来て、私の実験を手伝って下さいました。卒業時の私への色紙には、「先生の実験に首を突っ込み、先生の人柄にふれ、私の人生が変わりました」と書いてありました。確かに、公務員試験の何十倍という難関

にパスし、学校栄養士もほぼ決まっていた長崎さんに研究への道を薦めたのは私でした。卒業後、助手を経て、大学院へと進まれ冲中央生の元で研究を積まれた後、一九八七年研究助手として迎えられ、一九九一年に専任講師に、一九九五年に助教授にと着実に歩んでこられました。

その間、府立医科大学の生化学教室の岩島先生の元でD-アミノ酸酸化酵素の研究に携われ、一九九四年に医学博士の学位も取得されました。こうした生化学的研究ばかりでなく、コンピュータに関する知識、技術は非常に優れたものをお持ちで、ゲーム的要素を加えた栄養教育CAIシステムの開発や栄養教育におけるコンピュータの活用に関しても成果を上げられ、それを教育面でも遺憾なく発揮してこられました。授業の面のみならず、国家試験対策として行っている模擬

テストやCAIのケア、学部ホームページの更新などにも力を尽くされています。また、学外実習の担当者として学生の実習成果が上がるようにと学生と実習施設との間にたって細かい配慮をしてこられました。そのほかにも今年度は企画広報主任や情報システム運営委員として女子大の将来構想や情報システムのあり方などにも関与しておられました。長崎さんは大変誠実で、自分を偽ることが決してできない方でした。どんな小さなことにも全力でぶつかる方でした。そのことが知らず知らず疲れをため、ストレスとなつて蓄積されたのかも知れません。今は大好きなコーヒを片手に好きな音楽でも聴きながらゆっくりしていらつしやるのだと思えば少しは心が安らぐのでは。

仲佐輝子(女子大学生活科学部教授)

創造性の人・市川亀久弥先生



市川亀久弥氏略歴
 一九一五年一月三日生まれ。三八年京都帝国大学工学部内私立電気工学講習所修了後、六月日本電気計器株式会社に入社。その後京都帝国大学助手、京都人文学園講師を経て、同志社大学経済学部嘱託講師。六五年同理工学研究所研究員(教授待遇)として入社。七八年同教授に就任。
 二〇〇〇年八月二六日永眠 八十四歳

先生は京大工学部の助手のとき、学業試験の成績優秀者が必要しも優秀な研究者にならないという事実をしばしば目撃された。そこで独創とは何かをテーマにした論文を書き、大胆にも学位申請をしたが、そのような内容の論文は審査の対象にならなかった。しかし戦争末期で物資が欠乏して、創意工夫が求められていた矢先だったので、『独創的研究の方法論』(一九四四)として出版され、二千部が一週間で売り切れたという。二十九歳でこのような未開拓領域の、最初の包括的な著作を発表された先生は、早咲きの才人というべきである。



戦時中に出た先生のデビュー作『独創的研究の方法論』(一九四四)

先生の数多くの著作の原点と

もいべきこのデビュー作を、幸いして閲覧することができた。独創の確率的考察に始まり、創造性が多面的に達意の文章で論じられている。しかし特定の具体的な技術的問題の研究に明け暮れる工学部にあつて、先生のように広範な哲学的抽象論を展開するものは異端視された。しかしこれによって恩師の鳥養利三郎のみならず、田辺元、湯川秀樹など大家の知遇を得たのも事実である。その後の創造理論の追求は目覚ましい。『等価変換理論』(一九五五)を打ち立て、主著『創造工学』(一九七七)を大成し、さらに創造理論を映画・文芸活動に適用し、『感動の世界』(一九七八)、国家を論じ、『国家権力の解剖』(一九九二)、はては小説『黄金蠅』(一九八四)さえ手がけるといふ多彩さである。

体系樹立者らしく絶大な自信家だった

が、お会いすればいつも笑顔を絶やさず、気さくなお人柄だった。その絶妙な話術が湯川さんとの創造論対談『天才の世界』を生んだ。これは実質的には共著であるが、先生は黒衣に徹せられ、湯川単独の著書となっている。湯川さんにも先生と同じ頃から独自に温めてきた創造理論があり、いずれは両者を結合した、より包括的な創造理論の体系をつくることを二人とも期待していた、と述べられているが、湯川秀樹『天才の世界』(一九七三)、お二人の三十年に及ぶ交際は、一九七七年、先生の腑に落ちないまま中断した(市川亀久弥『破局からの創造』一九八四)。その真相は明らかでないが、先生の生涯が創造性一筋にささげられた創造的な生涯だったことは確かである。

島尾永康(元大学工学部教授)